

25周年記念発表会 「雅楽と聲明の調べ」を開催

浄土真宗という仏教が持つ多面的な文化を学び、分かりやすくアピールしていくことを目的に、姫路・播磨地域の同宗本願寺派の若手僧侶らによって結成された「真宗文化研究会」(真文会)が、会の25周年を記念する「雅楽と聲明の調べ」を開きます。

平成6年の結成以来、真文会では宗派の教義や仏事、お勤めの作法などについて勉強会を開いてきましたが、その一つとして取り組んできたのが「聲明」。聲明とは簡単にいうと、お経(仏典)にリズムと音階、節回しをつけた仏教音楽の一つで、キリスト教における聖歌のようなもの。インド、中国から日本に伝わり、宗派ごとに独自の発展を遂げたといわれています。

「いってみれば情に訴えるお経で、男性コーラスのようなもの。練習して体で覚えないと合わせることができないし、続けていくためには発表の場も必要になる。そこでウチの寺を練習の場に、年1回の報恩講の際に発表するようにしたのです」と、会の初代代表で亀山本徳寺住職の大谷昭仁さん。

こうした練習の成果が実り、結成20周年を迎えた平成27年には報恩講以外では初めての発表会となる「聲明の調べ」をキャスパホールで開催。予想を超える大勢の来場者が詰めかけ、会場に入りきれないほどの盛況ぶりでした。

これに力を得て、会員の間から上がってきたのが「雅楽もやりたい」の声。そこで平成28年度から33名の会員全員が参加し、楽器を購入して各自で練習するほか、月に1度は本徳寺に集まり、練習を重ねてきました。

3月13日(金)に姫路市文化センターで開く「雅楽と聲明の調べ」では、最初に真文会の会員全員で聲明を行い、その後には管楽器の笙、箏、篳篥、龍笛、打楽器の鞆鼓、太鼓、鉦鼓による雅楽演奏に移ります。

曲目も、よく知られる雅楽「越殿楽」のほか、童謡「朧月夜」や中島みゆきの「糸」などを予定しており、「今はもうひたすら追い込みで、2月から週に1回は練習に集まっています」と現代表の廣澤英徹さんが話せば、前代表の池本史朗さんも「我々が学んできた聲明や雅楽を通して、仏教をより身近に感じていただけたら」とアピール。真文会の活動を見守ってきた大谷さんも「温故知新という言葉があるように、古い仏教文化に触れることで、次の時代の仏教はどうあればよいか、皆さんとご一緒に考える機会になれば」と話しています。



左から池本史朗さん、大谷昭仁さん、廣澤英徹さん

真宗文化研究会



表紙 解説

姫路市立美術館蔵

須田国太郎《椿》1932年

姫路市立美術館は今年4月半ばまで休館となるため、恒例の姫路市美術展はイーグレひめじの姫路市民ギャラリーで開催します。そこで今回は館の所蔵品の中から、市展にまつわる作品を紹介します。

姫路市展の審査員は今でも有名な画家や評論家が名を連ねていますが、初期のころの審査員は「歴史的な」と言ってよい大家が務めていました。この作品《椿》を描いた須田国太郎も、第1回から第11回まで洋画部門の審査員を務めています。

中央の空間を省いて遠景の白い雪山と近景の黒の対比を際立たせながら、赤い椿の花を鮮やかに浮かび上がらせる手法はドラマティックで、スペイン古典絵画の遠近や明暗のコントラストを学習した成果を生かしています。初期の作品ですが、浮世絵や秋田蘭画にもみられる遠景と近景だけの構図を組み合わせたところに、西洋と東洋の融合を試みた須田芸術の萌芽がみられます。